

## 「リリー・マルレーン」神話 —— 覚え書 (1) ——

杉 浦 忠 夫

### 1

ハンプルク出身の若い詩人でグラフィカーでもあったハンス・ライブ (Hans Leip, 1893-1983) は、第一次世界大戦が始まった 1914 年に、プロイセン陸軍の召集に応じて、ベルリンの近衛歩兵聯隊に入営した。ライブは一兵士としてしばしば営門の夜間歩哨に立たされた。かれは歩哨勤務中に、午後 9 時の帰営ラッパが鳴る直前に、営門の前の街灯のもとで別れを惜しむ兵士とその愛する女性との熱っぽい場面を夜な夜な目撃した。帰営ラッパが鳴り響く直前のこの光景は、しかしまた哨兵勤務外の日々のライブ自身の体験そのものでもあった。

ライブの自伝的回想録によれば、ライブは入営中に二人の若い女性と親しく交際した。一人はマルレーン (Marleen) といい、軍医の娘でベルリン市内の衛戍病院に看護婦として働く大柄でエレガントな金髪娘であった。もう一人は、青果店で働くベッティ (Betty) という褐色髪の少女で、同年兵仲間からは「リリー」(Lili) という愛称で呼ばれていた<sup>1)</sup>。1915 年 4 月 3 日から 4 日にかけての歩哨勤務中に、突然ライブは詩作衝動に襲われた。歩哨勤務が終るや、かれは哨兵詰所の板張りの椅子に腰を下ろして、取り出した手帳に脳裡に浮かんでいた詩想を一気呵成に書き込んだ。

新兵教育期間が終り、カルパチア戦線への移動を目前にして死の予感を覚えながら書いたのであろうこの一篇の詩は、「リリー・マルレーン」„Lili Marleen“ の表題のもとに、1937 年刊行の詩集『港町の小さな手風琴』に収録された。しかしこの詩集に収められた「リリー・マルレーン」は、取り立てて論評の対象にされるほどの反響はなかった。1938 年に新進作曲家のシュルツェ (Norbert Schultze, 1911-2002) はこの詩を作曲した。その翌年、ブレーマーハーフェン出身の若い歌姫ラーレ・アンダーゼン (Lale Andersen, 1919-72) は、ベルリン、ミュンヘンなどのカバレットや演奏会でこの曲を歌ったが、まったく人気は出なかった。第二次世界大戦が始まった 1939 年に彼女はこの曲をレコードに吹き込んでエレクトロラ社から発売したが、それでも一向に人気は出なかった。このままでは「リリー・マルレーン」は曲名も作詞者も作曲家も歌手の名も全く無名のまま忘れられるところだった。

ところが第二次世界大戦勃発 2 年目の 1941 年に、この歌曲の運命に一大転機が訪れた。この年の春、ドイツ軍占領地のベルグラート放送局は、前線のドイツ軍兵士の慰問のための音楽番組のうちラーレ・アンダーゼン吹込みの「リリー・マルレーン」を放送した。すると「リリー・マルレーン」は、ドイツ軍兵士のみか、連合軍兵士から熱狂的な喝采を受けて、両軍兵士の、いわば敵味方の区別なき愛唱歌となった。銃後の一般ドイツ国民からも（ナチ宣伝省の禁止歌謡であったにもかかわらず）、絶大な人気を勝ち得た。「リリー・マルレーン」は、敵国であったイギリスから「第二次世界大戦最大のヒット曲」と讃えられたし、戦後なお今日に至るまで、「懐しのメロディー」のなかに不動の地位を占めてきた（後述するが、ドイツ国防軍や諸外国の兵士によって今でも行軍歌 Marschlied として歌われ、往年の名曲として、軍楽隊やビアホールのブラスバンドの演奏で聞くことができる）。

「リリー・マルレーン」は、おかげで無名の女性歌手だったラーレ・アンダーゼンを、それより遅れて同じ曲を歌って人気を取り戻した世紀の大女優

マルレーネ・ディートリヒ (Marlene Dietrich, 1905-72) に比肩するスターダムに一躍押し上げるようになった。序でながら「リリー・マルレーン」の作詞者ハンス・ライプはたった一篇の詩で、またその作曲家ノルベルト・シュルツェはたった一篇の詩の作曲によって後世に名を残す栄誉に与った。

2

**Lili Marleen**

Vor der Kaserne  
vor dem großen Tor  
stand eine Laterne,  
und steht sie noch davor,  
so wolln wir uns da wiedersehn,  
bei der Laterne wolln wir stehn,  
wie einst, Lili Marleen.

Unsere beiden Schatten  
sahn wie einer aus.  
Daß wir so lieb uns hatten,  
das sah man gleich daraus.  
Und alle Leute solln es sehn,  
wenn wir bei der Laterne stehn,  
wie einst, Lili Marleen.

Schon rief der Posten,  
sie blasen Zapfenstreich,

es kann drei Tage kosten,  
Kamerad, ich komm ja gleich.  
Da sagten wir auf Wiedersehn,  
wie gerne wollt ich mit dir gehn,  
mit dir, Lili Marleen.

Deine Schritte kennt sie,  
deinen zieren Gang,  
alle Abend brennt sie,  
mich vergaß sie lang.  
Und sollte mir ein Leids geschehn,  
wer wird bei der Laterne stehn  
mit Dir, Lili Marleen?

Aus dem stillen Raume,  
aus der Erde Grund  
hebt mich wie im Traume  
dein verliebter Mund.  
Wenn sich die späten Nebel drehn  
werd ich bei der Laterne stehn  
wie einst, Lili Marleen<sup>2)</sup>.



- (1. 兵営の前／大きな営門の前に／一基の街灯 Laterne が立っていた、／  
そして街灯がまだ営門前に立っているなら、／そこでまた会おう  
よ、／街灯のところに立とうよ、／いつかのように、リリー・マルレー  
ン。
2. ぼくらの二人の影は／一体になったように見えた。／ぼくらがこん

なに愛し合っているのは、／これを見ればすぐ分かった。／そしてみんなに見てみもらいたかったね／ぼくらがラテルネの所に立っているのをさ、／いつかのように、リリー・マルレーン。

3. 歩哨は叫んだ、／帰營ラッパが鳴ったぞ、／遅れたら三日間の営倉暮らしだ、／戦友よ、直ぐ戻るからな、／そこでぼくたちはさよならを言った、／どんなにきみと一緒に went かったことか、／きみと一緒にだ、リリー・マルレーン
4. きみの足音を街灯は覚えている、／きみの可愛い足どりも、／毎晩あの街灯は灯っている、／ぼくのことはとくに忘れてしまったな。／もしぼくの身に何か危害が起こったら／だれが街灯のところに立つだろう？／きみと一緒にだよ、リリー・マルレーン。
5. 無言の領域から、大地の底から／夢うつつにぼくを起こしてくれる／きみの熱っぽい口もとが。／夜霧が晴れたら／ぼくはラテルネのところに立つだろう／いつかのように、リリー・マルレーン。）

ハンス・ライプの「リリー・マルレーン」は、戦場での死を予感する出陣間近の兵士の別れねばならない恋人との再会を夢見る切ない心境を、事実と虚構と幻想を交えて、いわばメロドラマ風に描いた抒情的な一篇の詩である。「リリー・マルレーン」は、人間存在の本質を見究めて読む人をして高雅深遠の境地に導くといった趣きのある「詩人と哲学者の国」の詩に属するものではない。ドイツ詩史叙述から洩れた群小詩人の普遍的な人間情緒に訴えるセンチメンタルな抒情詩である。またそれゆえに適応するメロディーが伴い、歌い手の感情移入能力が加われば、聞く人の心情を揺さぶり、熱狂的な感動を与えることも可能にするだろう。

「リリー・マルレーン」の人気を作り上げた一つの鍵は、作詞家が出征のために別れざるをえない最愛の女性との再会を夢見る若い兵士の心情を、誰もがすでに知っている名曲「菩提樹」に重ね合わせていることに由来する。

「リリー・マルレーン」は、既成の有名歌曲に寄り掛かることで効果を高めることに成功した事例の一つだ。余りにも有名なヴィルヘルム・ミュラーの連作歌曲集『冬の旅』の第5曲「菩提樹」は、「市門の前の泉のほとりに／一本の菩提樹が立っている」 („Am Brunnen vor dem Tore/Da steht ein Lindenbaum.“ で始まる。他方「リリー・マルレーン」の冒頭部分は、「門の前」(Vor dem Tor) という場所規定に(市門 die Stadttor と営門 die Kasernentor との違いはあれ)、菩提樹に代わって一基の街灯(ラテルネ)が立つ。

ところで菩提樹は、ドイツ語圏文学の伝統では「甘美な愛の象徴」だとされる<sup>3)</sup>。「リリー・マルレーン」では、菩提樹に代わって夜のラテルネが「甘美な愛の象徴」の役割を演ずる。市門のほとりに立つ一本の菩提樹は、失恋し絶望した放浪の若者に向かって、「私の所に来たまえ、きみ／ここがきみの安らぎの場所なのだよ (Komm her zu mir, Geselle,/Hier findest du deine Ruh,)」と呼びかけ、そして最後に「あそこでならきみは安らぎを見つけれられるのに (Du fändest Ruhe dort!)」とささやきかけて、傷心の若者の心に菩提樹への絶えざる注目を喚起する。「リリー・マルレーン」では、各節の終りの「いつかのようにリリー・マルレーン」「きみと一緒にリリー・マルレーン」と、リリー・マルレーンの名の繰り返しが、営門前に立つラテルネのもとでの再会の期待を高め、少年時代に聞かされ歌わされて記憶の底に埋もれていたであろう「菩提樹」への回想を伴って更に効果を高める。描かれた構図は一見単純そうに見えながら、その実巧妙な仕掛けで作られた詩であると言ってよかろう。

## 3

ハンス・ライプの「リリー・マルレーン」は、再度言うように、恋人との別れを惜しむ兵士の惜別の情を描いた作品であって、飽くまでも男の立場か

ら書かれた男の歌曲である。ところがラーレ・アンダーゼンが歌う「リリー・マルレーン」の歌声が前線向けに放送され、ドイツ軍兵士と連合軍兵士から圧倒的な歓迎を受けると、それに便乗して男性歌手もこの曲を舞台で歌い、かつレコードに吹き込んだ。ビング・クロスビーやフランク・シナトラ、その他ペリー・コモ、J.C. パスカル、アル・マルティノーなども英訳でこの曲を歌った。ところが男性歌手の歌った「リリー・マルレーン」は全く人気が出なかった。却って遅れて参加したマルレーネ・ディートリヒの英語版「リリー・マーレーン」(„Lili Marlene“)の方が遥かに高い人気を勝ち得た。その他にも何人か女性歌手が英語以外のヨーロッパ各語で歌ったが、アンダーゼンとディートリヒには敵し得なかった。「リリー・マルレーン」と言えば、その極め付きは何といってもアンダーゼンとディートリヒ、とくに前者だった。アンダーゼンは殺倒するサイン攻めに快く応じたが、やがて彼女は差し出されたサインカードに „Lili Marleen“ と書くようになった。多くの「リリー・マルレーン」ファンが歌手のラーレ・アンダーゼンと曲の題名ともなっているリリー・マルレーンとを同一人物化するに至ったのだ。戦地からのラーレ・アンダーゼン宛の多くのファンレターの書き出しは „Liebe Lili Marleen“ であった。

一方、ヨーロッパ戦線で戦うアメリカ軍兵士のあいだでも、慰問団に加わって将兵の前で歌うマルレーネ・ディートリヒが題名の女性名と同一視された。英語版 „Lili Marlene“ とディートリヒの名前との一致のせいだろう。今はアメリカ人であるとはいえ、ベルリン生まれの生粋の誇り高きプロイセン女性が、歓喜するGIたちにかつぎ上げられて、「百万ドルの脚」と呼ばれた美脚を跳ね上げて宙に舞う写真<sup>4)</sup>を眺め、ラーレ・アンダーゼンがサインカードに „Lili Marleen“ と自署する姿を想像すると、「リリー・マルレーン・フィーバー」が社会的一現象であることを越えて、「リリー・マルレーン神話」に成り変ってゆく何かしら魔術めいた力がこの曲のなかに潜んでいるかに思えてくる。「リリー・マルレーン」は、なぜ女声で歌われなければ人気

が出なかったのか、女性歌手の歌うこの曲がなぜ「ヒトラーに対する抵抗の同義語」<sup>5)</sup> たり得えたのか。ラーレ・アンダーゼンとは何者であり、またマルレーネ・ディートリヒはこの曲を歌ったことでドイツに何をもたらしたのか。またなぜこの曲が驚くほど多くの替え歌を生み出したのか。「リリー・マルレーン神話」の形成に纏わり付くこれらの間に答える前に、第二次大戦という戦時態勢のなかで、「リリー・マルレーン」がどのように迎え入れられ、リリー・マルレーン神話 (Lili-Marleen-Mythos) がどういう筋道を経て形成されたのかを瞥見してみたい。

## 4

「リリー・マルレーン」が「第二次世界大戦の最大のヒット曲」と呼ばれたそもそもの発端は、1941 年下旬、ドイツ軍の占領地ベルグラート（ベオグラード Beograd, 現在セルビア・モンテネグロ共和国の首都）に新設されたドイツ国防軍放送局 (Deutscher Soldatensender Belgrad) から、各地の戦線で戦っているドイツ軍兵士を慰問する夜間の音楽番組が放送されたことに始まる。これらの音楽番組のうち、もっとも熱狂的な人気を博したレコードがラーレ・アンダーゼンが吹き込んだ「リリー・マルレーン」だった。とりわけアフリカ軍団のドイツ国防軍兵士の愛唱歌となった。ドイツ軍兵士の「リリー・マルレーン」フィーバーは、やがてイギリス第8軍の兵士に伝染した。夜の9時57分になると、両軍のあいだに「ベルグラートにダイヤルを合わせろ」が合言葉になった。

ベルグラートの国防軍放送局の放送責任者としてレコード音楽の選曲を荷ったのは、陸軍少尉ライントゲン (Karl-Heinz Reintgen, 1915-1990) であった。かれは下士官時代に西部戦線に従軍したとき、音楽好きの戦友と毎夜酒保に屯してラーレ・アンダーゼン吹込みの「リリー・マルレーン」のレコードに聴き入った。ライントゲンは少尉に昇進すると同時に、もともとベルリ



ン放送局勤めであったことが幸いして、新設のベルグラート放送局に転属になり、前線に送る音楽番組の選曲を担当した。「リリー・マルレーン——若い哨兵の歌」が放送番組の一つに選ばれ、ここにこの曲の運命が決まった。「リリー・マルレーン」放送後、2,3日して前線の兵士からこの曲を毎日定時刻に流して貰いたいという反響が各地の野戦郵便局からベルグラート放送局に殺到した。こうして毎夜9時57分になると、前線の兵士たちは帰営ラッパと営門前の街灯を思い起こさせる若い女性歌手の甘い歌声に聞き入ったのだ。故郷を遠く離れた異郷の地で、いつ殺されるかもわからぬ恐怖を前にして戦う兵士にとって、うら若い女性の甘く切ない夜の街灯の歌が、どれほどかれらの心を慰めたかは察しがつく。「ベルグラートにダイヤルを合わせろ」の合言葉は前線の兵士のあいだばかりか、銃後のドイツ国民のあいだでも合言葉になった。

とりわけドイツ・アフリカ軍団の兵士にしてみれば、ヨーロッパ大陸で戦う兵士に比べて海を渡った砂漠での戦いであるだけに、家郷への思いは遙かに強かったであろう。これはイギリス軍（オーストラリア軍とニュージーランド軍をも含む）も、あとから参戦したアメリカ軍にとっても言える。ドイツ軍兵士と同じく連合軍兵士も夜9時57分になると、ラジオに耳を傾けたばかりか、ドイツ兵捕虜からこの曲を習って、敵味方で合唱したともいう。第二次大戦中の「リリー・マルレーン」の驚くべき人気の秘密を探るために、戦後各種の聞き取り調査が行われた。これらの膨大な調査資料とそれに基づく研究成果を通じてわれわれは、前線の兵士ばかりか、ドイツ国内の一般国民がいかにこの曲に熱狂したのかの具体的な諸例を目の当りにすることができる<sup>9)</sup>。そのなかでも特にアフリカ戦線での独英両軍の「リリー・マルレーン」をめぐる対応がわれわれの注目を惹く。

1941年5月初めのトブルク攻防戦に参加した一ドイツ兵はこう書いた。

夜の10時近く、われわれは車座になって全員静かにラジオに耳を傾

けていた。すると突然 80 メートルほどのところから何やらがさごそと音が聞えてきた。„Comrades, louder please!“ イギリス軍だった。この曲はもうかれらにも知れ渡っていたのだ。こうしてわれわれは毎夜一時休戦に与った。なぜならこの時間には撃ち合いは一切なかったし、この曲が終わったあとはずっと休戦状態が続いたからだ。

イギリスの従軍記者はこう報告している。

ドイツ兵ばかりかイギリス兵もラジオをベオグラード放送局に合わせ、毎晩聴いた。砂漠のなかでイギリス兵はそのメロディーを口笛で吹いていた。

時として敵味方が同時に、片方はドイツ語で、他方は英語で合唱する場面が見られたという<sup>7)</sup>。しかしまたドイツ語そのままで歌ったイギリス部隊もあった。場所は明示されていないが、イギリスのとある町はずれの酒場でのアフリカ戦線から帰還した兵士たちの集会に出会った一人のイギリス人の報告がある。

その酒場は普段はいつも空いていた。だがその夜はあっという間に満席になった。肩幅の広い大柄なスコットランド人たちだった。と突然かれらは歌い始めた。「リリー・マルレーン」をドイツ語で歌ったのだ。すかさず私のかれらに言った。「逮捕されないように気を付けなさいよ、きみらはドイツ語で歌っているからだよ」。すると第 81 ハイランド師団の一少尉が私の発言にムッとした様子でこう言った。「これは俺たちの歌なんだ、俺たちのものなんだ、……いいかい、砂漠のなかを行進する兵士の長蛇の列、全員『リリー・マルレーン』を歌っているんだ。いいかね、あれはぼくらの歌なんだ。間違いないよ」。そこで私は言った。

「一体なぜあなた方はあの歌を英語で歌わないんですか」。少尉はトブルクで分捕ったドイツのレコードにならって歌っているのだと答えた。

5

「リリー・マルレーン」の放送は、東部戦線でソ連軍と戦うドイツ兵をも熱狂させた。ラーレ・アンダーゼンの娘は、母親宛ての手紙のなかから独ソ戦に従軍中の一兵士の手紙を紹介している。この兵士にとっても歌手のラーレ・アンダーゼンはリリー・マルレーンと同一化されている。

愛するリリー・マルレーン。私は24歳で、数か月前からロシアで戦っています。あなたの歌は前線に来る前に何度も何度も聴きました。昨日私の最愛の戦友が戦死しました。かれは今わの際にもう一度「リリー・マルレーン」を聞かせてくれと頼みました。

ソ連兵士のあいだでさえ（勿論ほんの少数のみだろうが）、「リリー・マルレーン」フィーバーに感染した者がいたという。だが赤軍兵士とドイツ兵との合唱は当然のことありえなかっただろう。東部戦線ではアフリカ戦線よりも遥かに多くの武装親衛隊（Waffen-SS）が投入されていたし、第一ドイツ軍のソ連進攻がナチ政権の人種イデオロギーに基く「絶滅戦争」でもあったからだ。アフリカ戦線で「リリー・マルレーン」人気が沸騰し、やがて「リリー・マルレーン神話」にまで高められる契機を作ったのは、ドイツ軍とイギリス軍とのなかに人種理論に基く対立がなく、「最後のジェントルマンの戦争」と呼ばれたように、騎士道精神がまだ発揮できた（捕虜の取り扱いなどに見られる）最後の戦争であったからだ<sup>8)</sup>。

「リリー・マルレーン」フィーバーは兵士の戦意沮喪・士気低下をもたらすとの懸念から、兵士がこの曲を歌うのを禁止すべきではないかという意見

が連合軍から起こった。1942年5月25付け「デイリー・ヘラルド・トリビューン」誌に、「リリー、第8軍を捕える」という論説記事が掲載された。

「リリー・マルレーン」に何とか手を打たねばならぬ。ドイツの放送局が流すこのソングは、アフリカ軍団を寝かしつけ、夜な夜な我が第8軍兵士のセンチメンタルな耳をくすぐる。Lili Andersen [sic] なる女性歌手はドイツ軍の花形歌手 (toast) で、中近東におけるイギリス軍の麻薬になりつつある。……ねえ、私にキスして、と言わんばかりのハスキー・ヴォイスで男の懷郷病の心に直進する……。

「リリー・マルレーン」フィーバーは、アフリカ戦線におけるイギリス軍兵士のあいだだけではなく、1943年になると遅れて参戦したアメリカ軍兵士にも感染した。GIたちが好んでこの曲を歌ったからだ。1943年7月10日、当時従軍記者だったアメリカの作家スタインベック (John Ernst Steinbeck, 1902-68) は、熱狂的なリリー・マルレーン病に堪りかねて「デイリー・エクスプレス」に記事を寄せ、「今やリリーはアフリカのアメリカ軍のなかに滲み込んでしまった」として、「リリー・マルレーン」の歌唱の禁止を訴えた。

「リリー・マルレーン」の禁止を叫ぶ一部識者の声にもかかわらず、イタリアからドイツに向かって進軍を続けるアメリカ兵のあいだに、リリー・マルレーン・フィーバーは一向に治まらなかった。大戦末期のことだが、米軍の先遣隊がオーストリアのティロールに達したとき、あるガストハウスの女将から、こちらに「リリー・マルレーン」を書いた先生が滞在中だと聞かされた。すると先遣隊の兵士たちは、その場で一斉に英訳「リリー・マルレーン」を歌い始めたという。また米軍がドイツ国内に攻め込んだとき、一群の米兵が通りがかりに突然一軒のドイツ人住宅に押し入って、驚く家人を尻目にラジオのダイヤルを回して、丁度始まったばかりの「リリー・マルレーン」に

耳を傾けたようだ。

## 6

「リリー・マルレーン」フィーバーは、何も GI クラスにとどまったわけではない。アメリカのヨーロッパ派遣軍総司令官アイゼンハワー将軍 (Dwight David Eisenhower, 1890-1969) も、この曲に魅了された一人だった。ハンス・ライブの自伝的回想録によれば、アイゼンハワー将軍はティロールに到着して、たまたまこの土地に「リリー・マルレーン」の作詞家が隠遁生活を送っていることを知り、夜分遅いながら直ぐさま先生を司令部にお連れするようにと、副官をライブの滞在地に遣わせた。ライブは持ち前の酒脱な表現で、ナポレオンとゲーテの会見でもあるまいと皮肉ったうえで、「遅過ぎます。9時半には床に就きますので」と、将軍の申出を断った。翌日、副官はライブを再訪して将軍のことばをこう伝えた。

「そのまま寝かせておきなさい。あの男は戦争中にドイツでただ一人全世界を喜びで満たしてくれた唯一人の男だからな」

「リリー・マルレーン」フィーバーは、ヨーロッパ連合軍総司令官 (のち第 34 代アメリカ大統領) アイゼンハワーの心を捉えただけではなかった。イギリスのチャーチル首相 (Winston Leonard Spencer Churchill, 1874-1965) や、ユーゴスラヴィア連邦人民共和国首相のティトー (Josip Broz Tito, 1892-1980) などのヨーロッパの政治的指導者をも捉えた。チャーチルは戦後 1948 年春にフランスを訪れたが、その際宿泊していたホテルの専属楽団に「リリー・マルレーン」を演奏して欲しいと頼んだという。またティトーは、対独レジスタンス闘争の最中に、奪われたベオグラードから再三放送される「リリー・マルレーン」に耳を傾けたようだ。

戦時下のドイツ国内における「リリー・マルレーン」人気も一向衰えなかった。1942 年、ラーレ・アンダーゼンはドイツ語圏各都市の演奏旅行に何度

か出掛けた。このときの各地での演奏会がいかに大盛況であったかを娘のリッタ・マグヌス＝アンダーゼンが詳しく描いている。そのうちブレスラウでの演奏会の模様をこう描く。

時が経つとともに拍手が大きくなった。アンコールに継ぐアンコールだった。そのあげく、最後の最後に熱狂的な拍手を浴びて、あの馴染みの出だしの文句「兵営の前、大きな営門の前に……」が響き渡った。「リリー・マルレーン」を生きた姿で目の当りにした三千人のブレスラウ市民の感動は限りが無かった。ラーレ・アンダーゼンは舞台から立ち去ることができるまでに大変時間がかかった。最後にもう一度帰営ラッパが鳴ってお客様がこの歌を合唱するまで、彼女は舞台を離れるわけにはいかなかった……

国外の前線でも銃後の国民のあいだでも、「リリー・マルレーン」は愛され、歌われ続けた。「リリー・マルレーン」は敵味方の区別のない、勝者と敗者との共通の歌だった。1941年4月末の最初のラジオ放送から1945年のドイツ敗戦に至るまで、「リリー・マルレーン」は、単なる戦時愛唱歌謡であることを越えて、人間性を具えたすべての人々の心を動かす、いわば人類共通の愛唱歌になった。帰営時刻を気にして営門前の街灯のもとで抱擁して別れを惜しむ兵士とその愛する女性との光景を事実と虚構と幻想の入り混じった筆致で描いたハンス・ライプのこの一篇の詩は、カバレットの歌姫ラーレ・アンダーゼンの吹き込んだレコードの時宜を得た放送によって、リリー・マルレーン・フィーバーからリリー・マルレーン神話へと変容したのである。

#### 註

- 1) Hans Leip: Das Tanzrad oder Die Lust und Mühe eines Daseins. Frankfurt/Berlin 1979, S. 70-81. 「リリー」の愛称の由来は、ベッティーが餌針を手にしてニワトリに餌をやる様子がゲーテの「リリーの動物園」(Lilis Park, 1875)

- のある場面の連想に基いていると著者は語る。Tanzrad, S. 72f.
- 2) Hans Leip: Die kleine Hafenorgel. Gedichte und Zeichnungen, Hamburg 1937. S. 33/34. イラストはライプの自筆。Tanzrad, S. 79.
  - 3) 梅津時比古『冬の旅——24の象徴の森へ』東京書箱 2007年, 127-133頁。
  - 4) Der Spiegel, No. 4, 35 Jg. 19. Jan. 1981, S. 173.
  - 5) Hermann Kreuzer/Manuela Runge: Ein Koffer im Berlin. Marlene Dietrich — Geschichten von Politik und Liebe, Berlin 2001, S. 97.
  - 6) ここでは特に音楽民俗学 (Musikalische Volkskunde) の提唱者ヴィルヘルム・シェピングの論稿を挙げねばならない (後出の主要文献書目を参照)。
  - 7) 竹山道雄の『ビルマの豎琴』は、終戦の翌年 1946 年に児童雑誌『赤とんぼ』に掲載された。対峙するビルマの日英両軍が「埴生の宿」(Home Sweet Home) を唱和する感動的な一場面は、作者の幻想から生まれたオリジナルな創作なのか、それとも執筆した時点で、北アフリカ戦線での独英両軍の「リリー・マルレーン」合唱のエピソードを (欧米の新聞報道などを通じて) 既に知っていて、それをビルマ戦線に転用したのかどうか、真偽のほどは分からない。
  - 8) この点でイギリス軍が賞讃と敬意を惜しむことのなかったドイツ・アフリカ軍団の総司令官ロメル将軍 (Erwin Rommel, 1891-1944) の人柄と作戦指道が大きな役割を果たしたことを忘れてはなるまい。

#### 主要参考文献書目

- Hans-Leip-Buch, Das: Erinnerungen, Gedichte, Gedanken, Erzählungen. Hrsg. v. J. Jessen u.a. Frankfurt/M u.a. (Ullstein Buch 20545) 1985.
- Lehrke, Giesela: Wie einst Lili Marleen. Das Leben der Lale Andersen, Berlin 2002.
- Magnus-Andersen, Litta: Lale Andersen — die Lili Marleen. Das Lebensbild einer Künstlerin. Mit Auszügen aus bisher unveröffentlichten Tagebüchern, München 1981.
- Peters, Christian: Lili Marleen. Ein Schlager macht Geschichte, Bonn (Haus der Geschichte der BRD) 2001.
- Protte, Katja: Mythos »Lili Marleen« — Ein Lied im Zeitalter der Weltkriege, in: Militärgeschichtliche Zeitschrift. 63. Jg. (2004) S. 355-400.
- Schepping, Wilhelm: Zeitgeschichte im Spiegel eines Liedes. Der Fall „Lili Marleen“ — Versuch einer Summierung, in: Festschrift für Ernst Klusen, hg. v. Günther Noll u. Marianne Stöcker, Bonn 1984, S. 435-464.
- Spiegel, Der: Frühling für Hitler und Lili Marleen, Jg. 35, Nr. IV/1981, S. 168-176.